

名掛丁地下歩道

名掛丁東名会 梅津恵一

皆さん、名掛丁地下歩道をご存知だろうか。JR仙台駅の東西にある名掛丁を繋ぐ地下通路だ。入り口がわかりにくいこともあって、昔から慣れ親しんできた人が自転車で通行する人だけが利用している。この地下歩道は恐れ多くも軍部と隣接の町内会の対立から、その妥協策として昭和3年に造られた。明治20年に東北本線が開通して名掛丁が東西に分断されると、東西の名掛丁を往来するには踏切を渡る必要があった。この踏切に代わる新しい道路と橋（通称X橋）の建設を軍部は要求してきた。当時第二師団の兵舎は川内にあり、宮城野原の軍事訓練場に向かう途中に名掛丁の踏切で足止めされると、先発隊と後発隊の足並みがそろわず、合同演習に支障をきたすという理由だった。新しい道路とX橋の建設はこの街で商いを営む名掛丁町民にとっては死活問題であった。名掛丁町内会では伊藤病院の院長 伊藤幾三郎を中心に旧知の政治家、後藤新平をも巻き込んで、反対運動を繰り広げた。しかし、軍部の意向に一町内会が勝てるわけもなく、大正9年にX橋は完成した。しかしその後の粘り強い運動が実って名掛丁地下歩道が設置された。



この地下歩道は建設から100年近い時を経たせいか、今では「汚い」「暗い」「怖い」と3kを象徴している通路であった。しかしながら名掛丁の特に東側の住人にとっては、苦楽を共にしてきた思い出の通路だった。明治生まれの祖母から聞いた話だが、太平洋戦争の際には、仙台駅西側はアメリカ軍の空襲で焼け野原となり、黒焦げとなった遺体が散乱していた。ところが東側は戦火を逃れ、この地下歩道が生死を分ける大事な避難道となり、さらに一時戦災孤児の住処ともなった。

敗戦後はアメリカ軍が仙台にも駐留し、地下歩道北側のX橋界隈はアメリカの軍人相手の歓楽街となった。この歓楽街の出現で戦禍に遭った人たちは生きるために悲哀に満ちた人生を送った人もいた。その時代の話に興味のある方は熊谷達也著の小説『いつかX橋で』を是非読んで頂きたい。また地下通路では職を亡くした傷痍軍人がアコーディオンを演奏して、施しを求めている姿はまさしく敗戦国日本を象徴するものであった。



昭和30年代になると進駐軍は撤退し、西側は急速に復興が進んだが、私が生まれ育った東側は暗いイメージが残った昔のまま佇まいであった。西側はデパートや映画館そして新装した商店が立ち並び、目を見張る発展を遂げた。子供の頃親に手を引かれて地下歩道を通って西側に向かうと、心がわくわくしたものだ。

昭和60年代になるとようやく東側の再開発が話題となり、マスコミの人たちが西側から地下歩道を通って東側の町へ取材にやってきた。彼らが目にしたものは明治、大正、昭和に建てられた古い建物で、

西側との違いに「地下歩道はタイムトンネルだ」と言った。

かつての仙石線仙台駅（現在は東口パーキング）は東口、西口の両側に改札口があった。ところが仙台駅舎の建て替えで西口が閉鎖されると、仙石線の利用客が西側に行くには名掛丁地下歩道が便利で、一日の通行人が一万を超える日もあった。

この地下歩道も残念なことに平成18年に新設された仙台駅北部名掛丁自由通路に主役の座を奪われてしまった。しかし平成23年の東日本大震災の際にはJR敷地内の東西を結ぶ連絡通路がすべて被災して、通行止めになってしまったが、この地下歩道は無事通行できた。一時は閉鎖もうわさされたが、この度仙台市は補修工事して存続することを決定した。早速地元住人が「協議会」を立ち上げて、誰でも利用しやすい地下歩道、壁面にはデザイン画を、さらには駅東の魅力を伝える案内板の設置など様々な要望案をまとめて仙台市に提出した。仙台市は令和5年度以降にこの案を検討して設計を始める予定だ。

仙台市は明治20年に鉄道が開通して以来、街は東と西に分断されて異なる歴史を刻んできた。その違いを絶えず意識させてくれたのが名掛丁地下歩道だった。この不思議な空間を持つ地下歩道は伊坂幸太郎著の小説「重力ピエロ」が映画化された際に、そのロケ地ともなった。長年慣れ親しんできた地下歩道が東側の街の発展とともに、これからどのように生まれ変わるのか見守りたい。



写真提供
関連資料

梅津恵一 氏

いつかX橋で 熊谷 達也／著 新潮社 2011.5

重力ピエロ 伊坂 幸太郎／著 新潮社 2006.7

重力ピエロ【AV映像】 森 淳一／監督 ROBOT 2010

映画「重力ピエロ」photo book メディアファクトリー 2009.5

名掛丁・東名会～きのう・きょう・あした II 〈名掛丁東名会史II〉

名掛丁東名会／編集 名掛丁東名会 2021.7

名掛丁・東名会～きのう・きょう・あした 〈名掛丁東名会町内史〉

名掛丁東名会成年部 名掛丁東名会成年部 1991

関連資料



熊谷 達也／著
『いつかX橋で』
（新潮社刊）
※版元品切れ



熊谷 達也／著
『いつかX橋で』
（新潮文庫刊）
※版元品切れ



伊坂幸太郎／著
『重力ピエロ』
（新潮文庫刊）



名掛丁東名会／編集
『名掛丁・東名会
～きのう・きょう・あした II
〈名掛丁東名会史II〉』